# パルモア病院日記

## ―三宅廉と二万人の赤ん坊たち―

中平邦彦

新潮社

**中平邦彦**（なかひら・くにひこ）

1938年，兵庫県芦屋市に生まれる。
同志社大学卒業後，神戸新聞社に
勤務。現在，論説委員。
著書：『棋士・その世界』（講談社文庫）
『名人谷川浩司』（池田書店）

**パルモア病院日記**
——三宅縣と二万人の赤ん坊たち

一九八六年九月二〇日　発行
一九八七年三月五日　八刷

著者　中平邦彦
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03—二六六—五一一一
（編集部）03—二六六—五四一一
振替東京四—八〇八
印刷　東洋印刷株式会社
製本　大口製本株式会社
定価　一三〇〇円

© 1986, Kunihiko Nakahira
Printed in Japan

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-363301-8 C0047

パルモア病院日記＊目次

同籃記念会——揺りかご仲間十五年目の再会　7
白い巨塔を去るまで　27
焼け跡の診療所　53
小さな病院から大きな出発　66
*
パルモア病院日記
赤児誕生　111　新生児初回診　122
母親への退院講座　138　障害児との対面　144
よき母がよき子を産む　148　両親教育　155

離乳講座 160
子より母の治療 166
水曜礼拝 174
保母さんへのメッセージ 177
赤ちゃんの手型 182
シナイ半島への旅 186
子の命は誰のもの 190
盲目の子を訪ねて 194
六甲山上の討議 210
病院内の討議 220
八十二歳正月回診 227
周産期医療の理想と現実 231
専門領域を超えて 236
自宅集会の夜 240
*
パルモア病院あるいは理想の行方 245
あとがき 259

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

離乳講座　160
子より母の治療　166
水曜礼拝　174
保母さんへのメッセージ　177
赤ちゃんの手型　182
シナイ半島への旅　186
子の命は誰のもの　190
盲目の子を訪ねて　194
六甲山上の討議　210
病院内の討議　220
八十二歳正月回診　227
周産期医療の理想と現実　231
専門領域を超えて　236
自宅集会の夜　240

*

パルモア病院あるいは理想の行方　245
あとがき　259

# パルモア病院日記

## ——三宅廉と二万人の赤ん坊たち

# 同籃記念会——揺りかご仲間十五年目の再会

三宅廉は、いつもより早く眼が覚めた。病院へ出る普通の日より、ゆっくり寝ていてもよかったのに、勝手に起きてしまった。それから縁側のカーテンをあけ、空を見た。

昭和五十八年九月二十三日。秋分の日。夏の名残りが抜けきらぬ、むし暑い日だった。空は曇っていたが明るく、雨の心配はまるでなかった。

ほっとして朝刊に目を通したが、すぐに瞑目し、しばらくそのままでいた。目の奥がしらじらとし、膜を張ったような感じがする。八十歳の高齢の身に、全身を襲う疲労はなじみのものだった。朝、起きるたびに、ああ、今日も生かされてあると思う。それから身をもがくようにして筋肉をほぐし、起き上がった。

眼の裏側に残る疲れは、昨夜、長時間かけて書きあげた演説草稿の影響だった。以前ならペンで早く書いたのだが、眼が弱ったこのごろは筆で濃く書かないと読めない。そのために倍以上も時間がかかった。腕の疲れが肩に来て、それが全身にかかってくる。

だが、この日の三宅には、そんな疲れなどものの数ではなかった。今日、会える百数十人のかわいい〝孫たち〟のことを考えるだけでわくわくし、口元が自然にほころんでくるのだった。

——この日のために生きてきた。この喜びがあるからこそ頑張った。こんな至福を味わえるのは、世界中で私一人なんだ。

三宅は居ずまいを正し、感謝の祈りを捧げた。垂れた頭は折れたように深く、三宅を知らない人が見たら、深く寝入っているように見えただろう。

神戸市の中心部、国鉄元町駅から、だらだら坂を五分ほど上がるとパルモア病院がある。その道をへだてた向かいに、英語専門のパルモア学院があり、古い神戸っ子なら戦前からあるパルモア学院をよく知っている。

だが、パルモア病院が日本で初めて産婦人科と小児科を一致させた画期的な周産期教育病院だということをほとんどの人は知らない。そして、院長三宅廉が、日本で誰よりも早く周産期医療の必要を痛感し、身をもって実践したことはもっと知られていない。

人間の誕生はドラマチックな祝福を受けて始まる。しかし、人間の誕生は同時にドラスチックな危機の瞬間でもある。乳児死亡の八、九割が新生児の出産のときであり、身体障害のほとんどすべてが胎内と出産時の前後、いわゆる周産期で決定される。いわば、人の一生がそのスタート時点で大きく左右されるのである。

だが新生児に手を差し伸べる医学は軽視されてきた。仕方のないことだと見放されてきた。およそ五十年前、米ハーバード大学のクレメント・スミス教授はこれを「闇の谷」と言った。聖書の詩篇二十三篇四節に、有名なダビデの歌がある。

「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです」

スミスはこのThe valley of shadow on death（死の陰の谷）をもじって、死を誕生に置きかえて表現した。

「子供はみな、分娩末期に近づくと、高い崖から深い谷間に落ち込むようなもので、その内のほ

んの一部が分娩という難関、闇の谷からはい上がることが出来るが、多くのこどもはこの暗闇の中で死んでしまって日の目を見ることが出来ないのだ」

そして、闇の谷からはい上がれなかった子供の病名は「先天性生活力薄弱」と名付けられた。「この子は生きる力がなかったのです」という託宣である。こんな病名が堂々とまかり通っていたのだった。

この闇の谷に光を当てるために、三宅は半世紀を捧げてきた。小児科医師として新生児を診るとき、なぜこんな障害があったのかという根本を知らねばならない。それには、小児科が産科と協力して、胎児のときから熟知しなければならない。さかのぼって、両親のことまで知る必要がある。三宅は大学の小児科外来時代、大きな不幸を背負った子供の診察をしたとき、その発病のほとんどが妊娠中か、分娩時か、または新生児期であることを痛感したものだ。だが、これまでの医学はすべて〝回顧の医学〟だった。

「いつから痛いの？」と予診どりをし、振り返って聞く。聞かれた母親も子も、重要な周産期のことがわからないし、覚えてもいない。例えば「子供の様子がどこかおかしい」とやってくる。その原因が、出産のとき、十分間泣かなかったことにあらわれていることがある。そのことを産科医が重大に思わず帰したことが、あとに大変な障害を残し、おかしくなってから小児科医に見せにくる。それが普通のやり方であり、それで医学が成り立っていた。しかし回顧的に病気を見て行く限り、その原因には確証がない。

三宅が産婦人科と小児科を一体とする周産期医学の必要を痛感したのはまさにここにあった。回顧医学から百八十度転換した前方視医学。妊娠中の母親からすべてを聞きとっていく方法であった。大学病院にも産科はあり、小児科医が出向くことは出来ても、縦割りの組織では周産期医学の実現は不可能だった。三宅が医大教授という温床を飛び出し、掘立て小屋のようなクリニックから始める苦労を自ら買って出たのは、周産期医学の実際行動のためであった。この世に生ま



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三宅は居ずまいを正し、感謝の祈りを捧げた。垂れた頭は折れたように深く、三宅を知らない人が見たら、深く寝入っているように見えただろう。

神戸市の中心部、国鉄元町駅から、だらだら坂を五分ほど上がるとパルモア病院がある。その道をへだてた向かいに、英語専門のパルモア学院があり、古い神戸っ子なら戦前からあるパルモア学院をよく知っている。

だが、パルモア病院が日本で初めて産婦人科と小児科を一致させた画期的な周産期教育病院だということをほとんどの人は知らない。そして、院長三宅廉が、日本で誰よりも早く周産期医療の必要を痛感し、身をもって実践したことはもっと知られていない。

人間の誕生はドラマチックな祝福を受けて始まる。しかし、人間の誕生は同時にドラスチックな危機の瞬間でもある。乳児死亡の八、九割が新生児の出産のときであり、身体障害のほとんどすべてが胎内と出産時の前後、いわゆる周産期で決定される。いわば、人の一生がそのスタート時点で大きく左右されるのである。

だが新生児に手を差し伸べる医学は軽視されてきた。仕方のないことだと見放されてきた。およそ五十年前、米ハーバード大学のクレメント・スミス教授はこれを「闇の谷」と言った。聖書の詩篇二十三篇四節に、有名なダビデの歌がある。

「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです」

スミスはこのThe valley of shadow on death（死の陰の谷）をもじって、死を誕生に置きかえて表現した。

「子供はみな、分娩末期に近づくと、高い崖から深い谷間に落ち込むようなもので、その内のほ

その母にうながされて十五歳の女子高校生が三宅の前に立った。十五年前の記憶が一気に戻り、三宅は涙で眼鏡が曇ってしまった。そんな出会いが無数に展開されてきた会だった。この日も三宅は病院の廊下で母親につかまり、懐かしげに立ち話をしていた。

パルモア学院の講堂はもう満員だった。親子合わせて三百人を超えていた。前の方に子供らが腰かけ、両脇と後ろに親が坐った。親たちは、かつて同じ産室で過ごした記憶があって、知った顔を見てあいさつをしたり、にこにこ笑って坐っている。だが、十五歳の少年少女たちは少しとまどい、堅い表情をしていた。これから何が起きるのかという期待と不安が横顔に色濃く現れていた。

講堂の壇上に、病院理事長の樋口伴治、三宅廉、そして祝辞講演をする神戸キリスト教連合会会長の野木源治郎牧師が並び、樋口の司会で記念会が始まった。

三宅は壇上から、おとなしく坐っている十五歳の少年と少女たちを潤んだ眼で見回していた。フギャー、フギャーと泣き叫び、真っ赤な全身を縮めるようにしていた赤ん坊たちを、三宅は全員その手で触り、見つめ、どんな欠陥も見落とすまいと診察してきた。両足を持ち上げ、お腹を抑え、裏返して反発力を見、出産後何分で泣いたか、黄疸症状はどうかと細心の注意を払ってこの世に迎えた。その赤ん坊が見事に育ってここにいる。

――なんと美しいことか。

自分を見つめる十五歳の瞳を見て、三宅は毎年この思いを強める。そしてこれから、一人一人の成長ぶりをこの眼で確かめられる興奮が湧き出てくる。

樋口にうながされて、三宅が中央演壇に立った。小柄で細いその身体は、猫背のせいでいよいよ小さく、頼りなげに見えた。頭は真っ白だった。この数日後、出席者の多くは礼状を院長に出したが、そのうち二、三人の母親が手紙の末尾に「院長先生、足元が少しぐらつかれて心配でした。どうかお身体大切に」と書いたほどだった。

だが、マイクの前に立った三宅は、話す前にニコニコ笑った。白い歯がニッと見える、独得の人なつっこい笑顔が、一瞬にして親と子を引きつけた。それからこう切り出した。

「久しぶりでございますね」

その瞬間、会場の少年たちはどっと笑い、少年たちの突っ張っていた緊張がほぐれた。三宅の、まるで我が孫を見るようなまなざしと笑顔が、感受性の鋭い十五歳たちに、ふわりと伝わったのだ。

「十五年ぶりの再会です。私の最高の日です。ずっとこの日を待ちかねていました。奇跡のようでうれしいのです。皆さんの元気で若さあふれる姿を見て感無量です。きょうは秋分の日の祝日で、さぞあちこち行きたい所があったのに、この会を選んで下さった。でも皆さんはきっと来てよかったと思うはずです。十五年前の同じ故郷に帰ってきたのですから」

同じ故郷。この一言が会場を走り、子供らを暖かくつつんだ。隣に坐っている見知らぬ同世代の少年は同じ体重籠の仲間なんだという思いが、不思議な感情となって少年たちをとり込む。

「昭和四十三年に皆さんは生まれた。全部で四百九十九人でした。しかし大部分の人はどこにおられるかわからない。転勤があり、転居が激しかったからです。病院の人たちが必死になって電話帳をくり、二百三十八人だけわかりました。そのうちの百三十三人の人たちが来てくださった」

さりげなく話していたが、同籃記念会をする苦労は大変なものだった。パルモア病院は新生児のカルテを永久保存する。病気や心配事などで小児科を訪れたとき、出生のカルテが絶対に必要だからだ。そしてその子が母となり、またここで子を産むとき、カルテはますます重要度を増す。そのカルテの住所氏名から、五百の家庭に電話をかける。高度成長期の十五年だ。みんな動いている。そこで父親の名前を頼りに電話帳をくり、該当者とわかると案内状を出す。往復はがきの返信に子供の近況を書いてもらい、三宅がカルテと一人ずつ照合する。これも貴重な比較資料だ。

保育器の世話になった未熟児が、大柄な野球部選手になっていたりする。大変な作業だが、三宅には実に心楽しい労働だった。ほう、あの子がこんなに大きくなったかと喜び、また、あの子はやはり神経質な体質を引きずっていると納得したりする。出産後、何度も小児科の三宅の所へ来た子や、親子ひっくるめて相談相手になっている人、手紙や賀状のやりとりを続けている人も、他の病院では見られない多さだった。三宅が、ただ医師としてだけではなく、人生の先輩として、そして小児教育学の権威として、親身になって相談に応じるからだった。院長をたずねて来る人は必ず院長室へ通せ、というのが三宅の厳命であり、受付の看護婦から薬剤師まで全員がそれを守っている。

「今から二十七年前、昭和三十一年に病院を作りました。生まれてくる子は、人生で最大の難関の出産をくぐり抜けてくるのに、最もなおざりにされていたのが新生児でした。遅れていた医学分野でした。不幸な子を少しでも少なくするために病院を作ったのです。医師は私と婦人科の先生の二人、看護婦四人、二十一ベッドの小さい病院でした。今は全部で百三十人の大世帯になり、その間、きょうまでに一万九千七百十三人の赤ちゃんをこの世に迎えました。皆さんもこのあとで、きょう生まれた子を見てほしい。大先輩から祝福を贈ってほしい」

それから三宅は、彼らが生まれた十五年前のころを、社会科の教師のように語った。

ベトナム戦争のパリ和平会談の一方で、ソ連がチェコに侵入したこと。メキシコ・オリンピックがあり、アポロが打ち上げられ人類初の月面着陸をしたこと。学園紛争、三億円強奪事件、水俣病、イタイイタイ病の問題表面化、心臓移植問題もあった。時代は大きく変わろうとしていたが、豊かさも増した。

「皆さんは恵まれたときに生まれました。イナゴやサナギをすりつぶしてお乳の代わりにした戦後に比べたら夢のようで、みんな丸々と太って生まれたのです。生まれたときの皆さんは、ほやほやの焼き芋のように湯気を立てていました。私は一万九千七百十三人全部のほやほやを見まし

た。それは芸術品そのもので、実に美しいものでした」
貧民の救済と生協運動に生涯を捧げた賀川豊彦は、生前に三宅に手紙を出している。彼は三宅を励まし、新生児をこう表現した。
「その皮膚は絹よりも柔らかく、筋肉は真綿よりしなやかで、頬っぺは花よりあでやかで星のように輝いている」
ここまで話した三宅の表情が、次の言葉のときに厳しく引き締まった。
「しかし、どの子も美しいピンク色なら問題はないのですが、紫色の子や血の気のない子がいるのです。あなた方と同じ年の子にも十人いました。未熟児です。一キロ以下の子もいました。よそからもここへ運ばれてきました。城崎(きのさき)から来た子もいます。人生にとって最大のピンチで、適切な処置をしないと赤ちゃんの脳に大きな影響を与えます。幸い、みんなこれを乗り越えてくれました。この会場にも三人が見えています」
小さなどよめきが、さざ波のように会場に流れた。そのどよめきを圧するように三宅は続けた。
「皆さんが現在のように立派に成長したのは、心血を注いでここまで育ててくれた両親のお陰です。これから先も、このことを忘れないでほしいのです。ゴッホは、赤ちゃんの顔を『哲学者のようだ』と言いました。安全で何の心配もなかった母の胎内から出たときの驚きとショックは大変なものなのです。なんと寒くてやかましい所へ出たのかと、びっくり仰天するのです。このとき、お母さんがにっこりして抱きしめると安心するのです」
「生まれて四カ月まで母乳で育てる重要さはそこにあるのです。私の病院では断固、母乳で通しました。高度成長期でしたからミルクがよく売れたのに、皆さんの六割以上が母乳で育ちました。母乳でなければ完全な母ではないのです。どうしても母乳が出ずに、牛の子になった人も八パーセントいました」
講堂の窓は全部開け放たれていたが、残暑と人いきれで汗が出るほどだった。しかし、十五歳

の少年少女たちは身じろぎもせず三宅の話に聞き入った。校内暴力が吹き荒れたときであった。不安定で多感、そして反抗期の十五歳の彼らが実に真剣になっている。小学教師の父親の一人は、この光景に感動し、生徒達への取り組み姿勢を反省したと手紙に書いている。出席した百三十三人は、三十人が高校一年生、百三人が中学三年生だった。中学三年生にとっては、高校入試が気になる時期だった。

「シュバイツァー博士はこう書いています。『十四歳は最も美しいとき。世界中の人がみんな十四歳ならどれだけいいか』と。また、スイスの教育家ルソーは『十五歳を境に第二の人生が始まる』と言いました。今までは自分のことばかり考えていたけれど、これからは他人のことを考える一番大事なときです。本当の人生はこれから始まるのです。どうか人生の目的は何かということを考えて下さい。そしてこの同籃記念会の十五歳の日を思い出し、自分の心の中に光を消さないように努めて下さい」

それから三宅は一枚の紙を取り出し、高くかかげて見せた。三宅自身が、新生児全部の手を添えて取った朱肉の手型と、母親が授乳している写真がはってある記念証だった。この写真も、全部三宅が撮ったものだった。

「これと同じ物を退院のときにお母さんに贈っています。家へ帰ったら見せてもらって下さい。なぜ手型をとったのかは、手こそ将来何をするかを問うからです。未来の創造力を示しています。いいことをする手になってほしいのです。賄賂を取るのも手、人のために尽くすのも手です。どうか清い手であってほしいという私の願いなのです」

「その願いをこめて、きょうは皆さんに二つの記念品を差し上げたいと思います。一つは、ロダンの傑作〈考える人〉の模型です。私はパリでこの原型を見て感動しました。精神力を集中し沈思する姿、これが皆さんの姿であってほしいと念じています。そしてもう一つは聖書です。私の署名入りで差し上げます。少しずつ読んで、人生の真理を考えてほしいのです。一気に読んだ人



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com